

複合辞ニツレテとニシタガッテの共通点と相違点 ——明治・大正時代と現代の用例から

成 芳芳

1. はじめに

日本語教育でよく取り上げられ、その使い分けは日本語学習者を悩ますことが多い類義表現の1つに次のような表現がある(以下、例文の下線は筆者によるものである)。

(1) 時代の推移につれて合理主義がハバをきかすようになる。

(亀井宏『戦時少年ヒロシ』)

(2) しかし「和魂洋才」は、近代化の進展にしたがって、しだいに戦闘的な思想となりました。

(大江健三郎『あいまいな日本の私』)

(1)と(2)はどちらも2つの事態が連動して進展することを表す複合辞である。ここで、砂川(2013)、砂川(2014)を踏まえ、複合辞を以下のように定義しておく。

「連れる」「従う」という動詞からなる形式であるが、動詞が他の語と複合して、動詞の持つ実質的な意味、例えば(3)の「連れたつ」という意味や、(4)の「服従する」などの意味が薄れ、形式的にも固定化した用法しか持たなくなり、時間軸に沿って生起する2つの変化の関係性を表す一語相当の単位、接続助詞に準じる機能を果たす複合辞と化している。

(3) しかし、関係のない人間を橋に連れていく気持ちにはなれなかった。

(鎌田敏夫『揺れる夏追憶の橋』)

(4) 下僕は指示に従って、ひとつを船首に運んでいった。(佐藤賢一『双頭の鷲』)

本稿は、複合辞ニツレテとニシタガッテを対象に、明治・大正時代の日本語と現代日本語の比較を通して、その用いられ方に変化はあるのか、もしあるとしたら、どのような変化を辿ってきたのか、分析・考察しようとするものである。

2. 先行研究と研究目的

ニツレテとニシタガッテの先行研究の中で、両者の意味・用法の異同を明らかにした砂川(2013)の議論は大いに示唆に富む。

砂川(2013)では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)を用い、ニツレテとニシタガッテの意味・用法上の共通点と相違点を考察した。

両者の共通点として、ともに「XニツレテY」「XニシタガッテY」という形で、「一方向に進展するXの事態と連動してYの事態が生起し、進展する」と「多方向に進展するXの事態と連動してYの事態が生起し、進展する」という2つの意味・用法を持つ。本稿ではそれぞれ「一方向的な進展」と「多方向的な進展」と呼ぶ。

「一方向的な進展」は両者の最も典型的な意味・用法である。時間軸に沿って一方向に進展するXの事態と連動してYの事態が生起し、進展するという意味を表す。ニツレテもニシタガッテも用例の大半がこの用法である。

頻度は極めて少ないが2番目の共通の意味・用法は、「多方向的な進展」である。多方向的な進展とは「増減」などのように一方向への変化ではなく、「増えたり減ったりする」という多方向的な変化を表すXの事態と連動してYの事態も多方向的に生起し、進展する。

また、ニツレテのみ見られる意味・用法としては、以下の2つがある。

1つ目は「知覚で感知できるXの事態と連動してYの事態が生起し、進展する」である。この意味・用法は「音」「匂」「風」など知覚で感知できるモノを表す名詞が用いられ、「音がする」「匂いがする」「風が吹く」などの出来事が時間軸に沿って進展するのと連動してYの事態が生起し、進展することを表す。2つ目は「～はX1につれ、～はX2につれ」「X1につれ、X2につれ(て)Y」という形でX1やX2の変化と連動してYの事態が生起し、進展する。「歌は世につれ、世は歌につれ」のような慣用句から生まれたものである。本稿では1つ目を「知覚感知的な進展」、2つ目を「慣用的な表現」と名付ける。

このように砂川(2013)ではニツレテとニシタガッテ意味・用法上の特徴を明らかにしたが、ニツレテの「知覚感知的な進展」という意味・用法を述べる際、根拠として(5)のような例文が挙げられている(以下、文番号は本稿にあわせて変更した)。

(5) このかすかな梅の匂につれて、冴返る心の底へしみ透つて来る寂しさは、この云ひやうのない寂しさは、一体どこから来るのであらう。

(三好行雄『三好行雄著作集』 第3巻)
(砂川(2013), p. 49~50 より)

旧仮名遣いが含まれているため、(5)の出典『三好行雄著作集』の内容を確認したところ、大正時代の作家芥川龍之介の作品『或日の大石内蔵之助』¹からの引用であることが分かった。すなわち大正時代の日本語の複合辞ニツレテの用例も複合辞ニツレテの「知覚感知的な進展」の特徴づけと分析に用いられているのである。

BCCWJでは、「明治以降に執筆されたテキストは現代語のテキストであるとされ、明治以降のテキストが収録されている」(柏野・奥村, 2014)。しかし田中(2001)は複合辞の発達を論じた際に、明治期は「現代日本語の表現形式として確立する前の模索時代としての一面」を持ち、大正期を迎えるころには、「現代日本語の表現体系の骨格が形作られるにいたった」と述べている。複合辞の模索と安定していく時期としての明治、大正時代の日本語の例文と現代日本語²の例文を一緒に扱うと、正確に現代日本語の複合辞の意味・用法の特徴を捉えられなくなる可能性があり、例文の時代区分を

¹ 1917(大正6)年『中央公論』に発表した短編小説。

² 本稿では、1946年から現在までの東京語のことを現代語(現代日本語)と定義しておく。

した上での分析が必要であると思われる。

そこで本研究は明治・大正時代と現代を区分し、時期別にニツレテとニシタガッテの実際の使用例を抽出する。そして砂川(2013)の検証も兼ね、砂川(2013)と同様、ニツレテとニシタガッテの前接語の特徴、意味・用法の特徴を分析し、明治・大正時代と現代での両複合辞の変化を明らかにしたい。

なお、本稿の研究対象となる2つの複合辞ニツレテ、ニシタガッテは「伴う」「応じる」という動詞からできた複合辞ニトモナッテ、ニオウジテとも類似した用法を持つ。ニトモナッテについては、本稿で行った用例調査³の結果、その前接語のほとんどは例文(6)「規則化」のような名詞や、例文(7)「動詞+形式名詞」のような形式名詞「の」「こと」の前接挿入などである。前接語がほとんど動詞であるニツレテ、ニシタガッテの構文と異なる点があるため、今回の考察対象から除外し、今後の検討課題とする。

(6) しかし一方では組織の規則化に伴って、形の統一も進んでいる。

(風間喜代三『ラテン語とギリシア語』)

(7) さらに、連結財務諸表がメインになるのに伴って、作成ルールも大きく変化することになりました。(田中靖浩『ニッポンの経営を変える会計ビッグバン』)

ニオウジテに関しては、砂川(2014)によると、「構文が類似の意味を表すのは、周辺的な用法においてであり、典型的な用法においては、ニツレテ構文・ニシタガッテ構文とニオウジテ構文との間に大きな隔たりがあることを示す」と述べており、本稿では、対象外とした。以上を踏まえ、本稿ではニツレテニシタガッテは「連動的な変化の進展」⁴を表す複合辞と位置づけ、本稿における調査対象とする。

3. 調査資料と調査方法

3.1. 調査資料

本稿では、明治・大正時代の文学作品と現代の文学作品の用例を資料とする。

文学作品の用例を対象とする理由としては、ニツレテ、ニシタガッテは書き言葉⁵的によく使われているかどうかを確認するためである。もし書き言葉的によく使われると言うためには、書き言葉と対極に位置する話し言葉すなわち会話において、出現する傾向が少ないといえなければならない。その逆も同じである。そこで、地の文と会話文の双方がある程度出現することが期待できる文学作品が調査資料としてふさわしいと考えたのである。

³ 「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)の書籍の用例。

⁴ 砂川(2014)の定義を使用する。

⁵ BCCWJという書き言葉は最終的に文字化されたデータを意味しているが、本稿で書き言葉や話し言葉をいう場合には、単に文字に書かれているか、いないかではなく、それぞれの一種独特の性格を持った言語をいうのである。例えば、文字で書かれた文学作品の中のフィクションの話し言葉であるが、日常会話の話し言葉の特徴をある程度受け継いでいるので、話し言葉とする。

明治、大正時代の文学作品については、『CD-ROM 版 新潮文庫 大正の文豪』『CD-ROM 版 新潮文庫 明治の文豪』を使用し、さらに『CD-ROM 版 新潮文庫の絶版 100 冊』から 13 作品⁶を加えた。データ量は 10, 517, 743 語⁷である。作品の初出と合わせ、明治、大正時代の時期区分は 1887 年から 1929 年までと設定する。以下「明治・大正期」と呼ぶ。

現代の文学作品については、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)の検索ツールである中納言 ver. 1. 1. 0 を利用して文学作品データから用例検索を行った。データ量は 20, 139, 268 語⁸である。BCCWJ では作品の出版年は 1971 年から 2005 年までであるが、初出は 1946 年から 1971 年の間のものや 1946 年以前のものもある。本稿での現代語(1946 年以降)の定義と合わせ、現代の時期区分は 1946 年から 2005 年までとする。以下「現代期」⁹と呼ぶ。

例文には時期、作品の著者とタイトルを示す。

3. 2. 調査方法

3. 2. 1. 明治・大正期の用例選別基準

ニツレテに関しては、「に連」「につれ」で文字列検索し、複合辞ニツレテを含む文を抽出する。ニシタガッテについては、「に従」「に随」「に順」「に遵」「にしたが」で文字列検索し、複合辞ニシタガッテを含む文を抽出する。その際、以下の 3 つを調査の対象外とした。

第 1 に、動詞として使われている文を対象外とした。例えば、(8)は「連れたつ」という動詞「連れる」の使い方であり、(9)は「順応する」という動詞「従う」の使い方であるため、除外した。

(8) そうですね、漸との事で彼を私の家に連れて来ました。

(明治・大正期 夏目漱石『こころ』)

(9) この弟の勧めで、お種は皆なの意見に従って、更に許しの出るまで伊東に留まることにした。

(明治・大正期 島崎藤村『家』)

第 2 に、「これ・それ+ニツレテ」や「これ・それ+シタガッテ」という表現の中で、

⁶ 『CD-ROM 版 新潮文庫の絶版 100 冊』の翻訳作品以外の作品の初出を調べ、上記の明治、大正時代の文学作品の初出(1887 年～1929 年)の範囲と合わせ、菊池寛『真珠夫人』、島田清次郎『地上』、徳永直計『太陽のない街』、直木三十五『仇討浄瑠璃坂』、長与善郎『竹沢先生と云ふ人』、林不忘『丹下左膳』、正宗白鳥『生まざりしならば／入江のほとり』、武者小路実篤『愛慾／その妹』、室生犀星『性に眼覚める頃』、山本有三『波』、佐藤春夫『都会の憂鬱』、久保田万太郎『末枯／大寺学校』、宇野浩二『子を貸し屋』13 作品を選んだ。

⁷ CD-ROM に収められているデータをテキストデータ化し、茶釜(ver2. 4. 1)で形態素解析を行い、延べ語数を求めた。語数には空白、記号を含まない。

⁸ 「中納言コーパス検索アプリケーション」<http://chunagon.ninjal.ac.jp/>

⁹ 「現代期」という名称は小池(2003)の用語を使った。但し小池(2003)では、現代期の時期区分は 1974 年から 2000 年までである。

複合辞ニツレテとニシタガッテの共通点と相違点

指示代名詞「これ」「それ」の指示対象を観察し、ニツレテ、ニシタガッテが動詞と判断される場合、除外する。(10)の「それ」の指示対象は「歴史」であり、「歴史のままにする」という意味の動詞「従う」として使われているため、対象外とした。

(10)これは隋書の経籍志に、「周書十卷、汲冢の書、仲尼刪書の余に似たり」と誤記されたことから起つてゐるので、もとより隋書は堂癩たる歴史であるから、それに従つて世俗が汲冢周書といふのも所以無くはないが、隋書が間違つてゐるのだから致方無い。(明治・大正期 幸田露伴『太公望・王羲之』)

第3に、検索にかかってしまう無用な表現も対象外とした。(11)のように、「つれない」の連体形である「つれなき」は「につれ」という検索にかかってしまったため、対象外とした。

(11)(前略)世の人のわれにつれなきを知らず、爪の先に垢のたまるを知らず、蛸寺の柿の落ちた事は無論知らぬ。(明治・大正期 夏目漱石『野分』)

なお、動詞か複合辞か、意味のみを根拠にしてはどちらか迷う場合は構文テストを用い、選別する。詳しくは3.2.2節で述べる。

以上の基準により選出した結果をまとめたものが表1である。ニツレテは計350例、ニシタガッテは176例である。

表1 明治・大正期の抽出結果

ニツレテ		ニシタガッテ			
表記形式	頻度	表記形式	頻度	表記形式	頻度
に連れ	69	に従つて	91	に従ごうて	1
に連れて	7	に従つて	36	に随つて	12
に連れて	1	に従うて	4	に随つて	1
に連れて	4	に従ひて	2	に随ひて	2
につれ	33	に従いて	1	に随い	1
につれて	236	に従がつて	2	にしたがつて	14
		に従い	1	にしたがひ	1
		に従ひ	6	にしたがつて	1
総計：350		総計：176			

3.2.2. 現代期の用例選別基準

現代期の例文収集は中納言を使って行った。まず中納言で検索対象を限定する。サブコーパス「出版・書籍」(非コア)から「9文学」、サブコーパス「図書館・書籍」(非コア)から「9文学」、サブコーパス「特定目的・ベストセラー」(非コア)から「9文学」を選択する。次に、「短単位検索」を選択する。そして、「語彙素読み」でそれぞれ「ツレル」「シタガウ」を入力し、検索する。検索結果は「ツレル」3932例、「シ

タガウ」2276例である。この検索結果から複合辞の選別を、以下のような4つの手順で行った。

第1に、辞書¹⁰での動詞の意味記述に従い、動詞としての「連れる」と「従う」の意味を明らかにする。動詞としての「連れる」の意味は「①連れたつ。②同行者としてひきいていく」である。動詞としての「従う」の意味は「①あとについて行動する。②命令・教え・きまりなどを守る。③服従する。④自然の力に動かされるままに任せる。⑤道、川に沿って進む。⑥順応する。⑦従事する」である。以上の意味に当てはまる動詞としての例文は排除する。例えば、(12)は「連れたつ」という動詞「連れる」の意味で使われている。(13)は「命令・教え・きまりなどを守る」という動詞「従う」の意味であるため、排除した。

(12) 出発が近づいたある日、お春は祖父に連れられて、おたつの店を訪れた。

(現代期 小島笙『ジャガタラお春-海を越えた少女』)

(13) 美希の指示に従い、滑るように床を歩いてソファに近づく。

(現代期 逢坂剛『[ノスリ]の巣』)

第2に、「これ・それ+ニツレテ」や「これ・それ+シタガッテ」という表現の中で、指示代名詞「これ」「それ」の指示対象を観察し、ニツレテ、ニシタガッテが動詞の用法である場合、除外する。(14)は「それ」の指示対象は「定め」であり、「定めを守る」という動詞「従う」の意味として使われているため、対象外とした。

(14) どんな定めも巨大な権力者によって作られたものであり、それに従って生きていく限りは権力者の飼犬にすぎない。(現代期 安部龍太郎『黄金海流』)

第3に、接続詞としての「シタガッテ」を排除する。

(15) 冬の間は、これをつけっ放しにする。従って、非常に室内が乾燥する。

(現代期 山口瞳『男性自身巨人ファン善人説』)

第4に、動詞か複合辞か、意味のみを根拠にしてもどちらか迷う場合は砂川(2013)を参照に、構文的テストを用いて選別する。砂川(2013)では、「複合辞は『連れる』や『従う』という動詞が文法化してきた形式である。そのため、『連れる』よりもさらに『動詞らしさ』を失い、使用される形式が連用形やテ形に限定される他、否定、受け身、使役、可能などで用いたり、主文の述部に用いたりすることができなくなっている」と述べている。そこで、構文的テストは以下のように行う。(16)と(17)は複合辞であるため、否定の「発展につれずに……」「進行にしたがわずに……」に使用することができない。また述部の「……発展につれた」「……進行にしたがった」に使用することも不可能である。

¹⁰ 『日本国語大辞典』第二版と『大辞林』第三版を参照。

- (16)江戸時代、板(版)画の急速な発展につれ、春画が美術品として大いにもてはやされた。
 (現代期 澤田ふじ子『火宅の坂』)
- (16')*¹¹板(版)画の急速な発展につれずに、春画が美術品として大いにもてはやされた。
- (16'')*春画が美術品として大いにもてはやされたのは、板(版)画の急速な発展につれたのだ。
- (17)(前略)カウンセラーの進行にしたがって話し合いを進めている。
 (現代期 天童荒太『家族狩り』)
- (17')*カウンセラーの進行にしたがわずに、話し合いを進めている。
- (17'')*話し合い促進は、カウンセラーの進行にしたがった¹²。

翻訳作品の例文を除外したほか、初出が1946年以前の作品¹³からの例文も除外した。抽出した複合辞(表2)はニツレテ426例、ニシタガッテ109例である。

表2 現代期の抽出結果

ニツレテ		ニシタガッテ	
表記形式	頻度	表記形式	頻度
に連れ	0	に従って	46
に連れて	7	に従い	12
につれ	159	にしたがって	41
につれて	260	にしたがい	7
		に従ひ	2
		に従つて	1
計	426	計	109

4. 考察

4.1. 地の文・会話文での使用傾向

表3は各時期別にニツレテとニシタガッテの全用例のうち、地の文、会話文¹⁴の出現数を示したものである。

¹¹ “*”は非文を表す。

¹² ニシタガッテの場合、複合辞でもこのような言い換えができる場合がないわけではない。そのような場合は、言い換え後の意味が複合辞の意味と同じかどうかをチェックする。「したがわず」「したがった」は「順応する」という動詞の意味であり、もとの複合辞「にしたがって」の表す意味と異なっている。

¹³ 泉鏡花『新編泉鏡花集』『泉鏡花集』、谷崎潤一郎『武州公秘話』、岡本綺堂『白髪鬼』、内藤鳴雪『鳴雪自叙伝』、太宰治『津軽』、坂口安吾『意欲的創作文章の形式と方法』、宮崎滔天『日本文芸鑑賞事典』、夏目漱石『吾輩は猫である』、江馬修『山の民』。

¹⁴ 「」や『』などの標識で示した発話文や心中思惟文を会話文と判断した。

ニツレテもニシタガッテも両時期を通じて、大きな変動はない。以下の用例(18)(19)のように、ニツレテとニシタガッテ両者ともに、会話文への出現は見られたが、少なく、地の文での使用が極めて多いことが分かった。

(18)『わたしだツて、自分から愛してゐます、わ。』『ところが、その問題だ——段々
年を取るに従つて男女の情愛は表面に見えなくなるとしても、愛してゐると云
ふ言葉だけで、実際はそんな気色もないのでは困る。……』

(明治大正期 岩野泡鳴『泡鳴五部作』)

(19)「…嫌なんだよ。ぞっとするんだ」「まあ、大きくなるにつれ、可愛げがなくな
るさ」 啓司は黙り込む。 (現代期 柚木彩『逃奔の彼方』)

表3 時期別地の文・会話文での用例数

	明治・大正期		現代期	
	ニツレテ	ニシタガッテ	ニツレテ	ニシタガッテ
会話文	9(2.6%)	11(6.3%)	11(2.6%)	2(1.8%)
地の文	341(97.4%)	165(93.8%)	415(97.4%)	107(98.2%)
計	350(100%)	176(100%)	426(100%)	116(100%)

4.2. 前接語の特徴

4.2.1. 時期別前接語の品詞分布

表4は時期別に収集したニツレテ、ニシタガッテの前接語を品詞によって分類し、用例数を示したものである。

表4 時期別前接語の品詞分布

	明治・大正期		現代期	
	ニツレテ	ニシタガッテ	ニツレテ	ニシタガッテ
名詞	93(26.6%)	3(1.7%)	18(4.2%)	8(7.3%)
動詞	227(64.9%)	163(92.6%)	389(91.3%)	94(86.2%)
形容詞	0(0%)	1(0.6%)	0(0%)	0(0%)
準体助詞	10(2.9%)	8(4.5%)	2(0.5%)	5(4.6%)
指示代名詞	19(5.7%)	1(0.6%)	17(4.0%)	2(1.8%)
計	350(100%)	176(100%)	426(100%)	109(100%)

表4より、特徴的なのはニツレテの名詞接続の変化である。明治・大正期では名詞接続の用例が26.6%であったが、現代期においては、4.2%に減少した。ニツレテの名詞接続の変化に関する詳しい考察は4.2.2節で行う。

これに関連してニツレテは動詞や名詞以外の品詞の用例が少ないため、明治・大正期と対照的に現代期の動詞の比率は91.3%と大きな割合を占めている。

そして、両時期を通じて、ニシタガッテは、あまり変化がなく、名詞の用例が少なく、動詞が多く見られた。

最後に、明治・大正期において、(20)のような形容詞接続の用例が1例だけ観察された。「善い」は形容詞であるが、「自己を愛することがかつ深くかつ善くなるに従って……より明瞭にし得る」と解釈でき、時間軸に沿って変化し、進展することが読み取れる。

(20) 自己を愛することがかつ深くかつ善いに従って、私は他から何を摂取しなければならぬかをより明瞭にし得るだろう。

(明治・大正期 有島武郎『惜みなく愛は奪う』)

4.2.2. 名詞に関する考察

ここで、時期別にニツレテの名詞接続の変化を考察する。明治・大正期と比べ、現代期の名詞接続が大幅に減少した。

図1 ニツレテの名詞接続の時期別用例比率

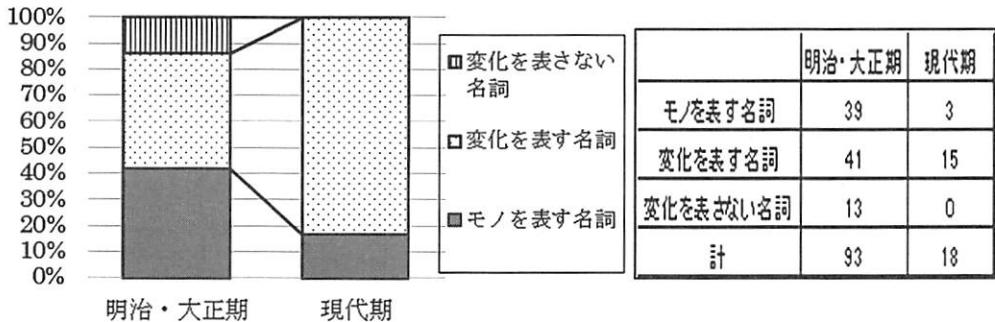


図1はニツレテの名詞接続の時期別用例比率を示したものである。まず、明治・大正期は41例、現代期は15例で、ともに「進行」「変化」「動き」など、何らかの変化を表す名詞や変化を含意する名詞が多数を占める。

次に、「世」「音」「匂い」などのモノを表す名詞が観察された。明治・大正期の39例はすべて後述で述べる「音」「風」「匂い」など知覚で感知できるモノを表す名詞であるのに対して、現代期では現れなかった。現代期の「世」「日」などの3例のモノを表す名詞は「慣用的な表現」に属する。詳しくは4.3節で述べる。

そして、明治・大正期のニツレテの名詞接続には、変化を表さない名詞「電車」「問題」「余裕」などが観察された。(21)(22)では、一見「電車」や「余裕」は変化を表さないが、前の文脈の「電車は……来ていた」「余裕が出来て」から、変化を表す意味が読み取れる。このような「<変化を表す前文脈>—<変化を表さない名詞>+ニツレテ」構文は明治・大正期では13例見られたが、現代期では見られなかった。現代日本語においては、代わりに動詞が使われているのではないかと思われる。動詞の比率が

91. 3%と大きいのもその一因と推測できる。

(21) けれども電車は静止してゐるのではなかつた。お雪が感嘆した時電車はお雪の
 一間近くに迄来てゐた。電車につれて動いてゐた群集の視界へお雪の姿がはつ
きり映つた。 (明治・大正期 島田清次郎『地上』)

(22) 自分は何がジャンボーなんだか分らないが、みんなの注意が、自分を離れると
 同時に、気分が急に暢達した所為か、自分もジャンボーを見たいと云う余裕が
出来て、余裕につれて元氣も出来た。

(明治・大正期 夏目漱石『坑夫』)

4. 3. 意味・用法の特徴

4. 3. 1. 時期別意味・用法の特徴

時期別にニツレテとニシタガッテの意味・用法を表5にまとめた。

表5 時期別ニツレテとニシタガッテの意味・用法

	明治・大正期		現代期	
	ニツレテ	ニシタガッテ	ニツレテ	ニシタガッテ
一方向的な進展	311 (88.9%)	175 (99.4%)	423 (99.3%)	108 (99.1%)
多方向的な進展	0 (0%)	1 (0.6%)	0 (0%)	1 (0.9%)
知覚感知的な進展	39 (11.1%)	/	0 (0%)	/
慣用的な表現	0 (0%)		3 (0.7%)	
計	350 (100%)	176 (100%)	426 (100%)	109 (100%)

表5より第1に、ニツレテの一方向的な進展の意味・用法は明治・大正期(311例)と現代期(423例)はあまり大きな変化がなく、各時期のほとんどの例文はこの意味・用法であり、ニツレテの典型的な用法ともいえる。(23)は「一方向に進展する『年が経つ』ことと連動して、Yの変化が進展する」ことを、(24)は「一方向に進展する『山が高くなる』という事態と連動して、Yの事態も進展する」ことを表している。

(23) 年が経つに連れて、おかんは極楽の凡てに飽いてしまった。

(明治・大正期 菊池寛『藤十郎の恋・恩讐の彼方に』)

(24) 山が高くなるにつれ、霧が濃くなってきたのだ。

(現代期 鈴木英治『道中霧』)

ニツレテと同様、一方向的な進展はニシタガッテの典型的な用法でもある。明治・大正期と現代期ともに、この用例が多数を占め、変化は見られない。

(25) 然し、渠が歌よみとしての努力が薄らぎ、新聞記者としての生活に深入りするに從ひ、その性格は段々変化して行つたのであるとは、義雄も想像出来た。

(明治・大正期 岩野泡鳴『泡鳴五部作』)

(26) しかし、読み進むに従い、ラッセルはしだいに表情をなくしていった。

(現代期 かわい有美子『水に映った月』)

第2に、ニツレテの多方向的な進展については、砂川(2013)では、『動き』という名詞に接続する以下のような例がわずかに見られた程度である」と述べ、2例を挙げた。

(27) それらの部屋のかたちは、私たちの動きにつれて変わるのね。しゃがめば、ほとんど部屋はなくなってしまうじゃない。(マドリン・ギンズ/荒川修作(著)/河本英夫(訳)『建築する身体 人間を超えていくため』)

(28) シーソーの動きにつれて、木綿のブラウスの胸が突き出たり引っ込んだりし、板にまたがっている腰や太腿のあたりのジーンズがぴんと張っていた。(ロバート・ジェームズ・ウォラー(著)/村松潔(訳)『スローワルツの川』)

(砂川(2013), p. 49 より)

砂川(2014)はこの用法を「周辺的な用法」と定義した。本稿では1946年以降の翻訳作品以外の文学作品に限定し調査したのもその一因なのか、この多方向的な進展を表す用法の用例は今回の調査では、見られなかった。

ニシタガッテの多方向的な進展については各時期に1例ずつ見られた。用例がわずかであるが、現代期だけでなく、明治・大正期においてもこの多方向的な進展という意味・用法が確認できた。(29)の「濃淡」のように一方向への変化ではなく、「濃くなったり淡くなったりする」という多方向的な変化を表すXの事態と連動してYの事態も「光の増したり減じたりする」という多方向的な変化を表している。(30)は「変わる敵の動き」という多方向の動きと連動して、「新陰流の極意の変転」という多方向的な動きを表していることが読み取れる。

(29) 夜舟で寝ることは、罪人にも許されているのに、喜助は横になろうともせず、雲の濃淡に従って、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙っている。その額は晴やかで、目には微かなかがやきがある。

(明治・大正期 森鷗外『山椒大夫・高瀬舟』)

(30) 「構え」は固定した型であり、敵の動きに従って変転する新陰流の極意—「転」にはそぐわないからだ。

(現代期 須賀しのぶ『虚剣』)

第3に、ニツレテのみ見られる意味・用法に関しては、以下のような特徴が見られた。まず知覚感知的な進展は時期別に大きな変化が見られた。明治・大正期では39例見られたが、現代期では見られなかった。この変化については次節で考察する。

次にニツレテの慣用的な表現は明治・大正期はなかったが、現代期に「世」「日」など3例あった。

(31) 歌は世につれ「あなたの愛唱歌は？」というアンケートが時々来る。

(現代期 佐藤愛子『これが佐藤愛子だ』)

4.3.2. ニツレテの知覚感知的な進展について

知覚感知的な進展とは「音」「匂」「風」など知覚で感知できるモノを表す名詞が用いられ、「音がする」「匂いがする」「風が吹く」などの出来事が時間軸に沿って進展するのと連動してYの事態が生起し、進展することを表す。今回の調査では明治・大正期において39例見られたのに対して、現代期では見られなかった。

(32) 暫くすると朗々な澄んだ声で流して歩く馬子唄が空車の音につれて漸々と近づいて来た。
(明治・大正期 国木田独歩『武蔵野』)

(33) あたりではやはり賑な談笑の声につれて、大ぜいの裸の人間が、目まぐるしく湯気の中に動いている。(明治・大正期 芥川龍之介『戯作三昧・一塊の土』)

ここで、砂川(2013)の調査結果には、2節で提起した(5)のような例は他にあるのか、どのくらい存在するのかを検証するため、砂川(2013)と同じ検索方法でこの「知覚で感知できるモノを表す名詞」を収集した。筆者による収集結果は「音」4例、「風」1例、「声」2例、「歌声」1例、「歌」1例、「匂い」1例、「声明」1例、計11例である。なお、砂川(2013)から、以下のことが確認できる。

- ① 『音』『匂い』『風』など、知覚で感知できるモノを表す名詞が用いられ」という記述によると、「音」「匂い」「風」という3つの名詞は確認できる。
- ② 「表5名詞接続:直前の名詞の頻度」表(砂川(2013) p. 46)から、そのうちの「音」は4例であることも分かった。
- ③ 例文(5)のほか挙げられたもう1つの例文から「声明」という名詞も確認できる。

以上を踏まえ、検証できた例文は(5)と(34)～(39)である。

(34) 音につれて暮らしの始まる姿がみえますね。
(島尾ミホ/石牟礼道子『ヤポネシアの海辺から 対談』)

(35) “ドンドコドン、カ、カッカカッカ”太鼓の音につれて、釜のまわりを一廻りした後、湯たぶさを釜の中につっこんではあたりに湯をふりかける。
(下平宗男『祭礼行事 都道府県別 長野県』)

(36) 午後になつて、(中略)、静まり返つた遠くの校庭から、ぴりり、ぴりりと笛の音につれて、何だか、ぢやら、ぢやらと云ふ音が、規則正しく区切りを切つて聞こえて来る。
(内田百閒『芥川龍之介雑記帖』)

(37) この音につれて、前のベトベトした搦きたたのお供え餅のようなのが一重ねずつになつて無数に連絡し、湖面のいずれからともなく漂泊として漂い来るのです。
(Yahoo!ブログ)

(38) 熱してまっ赤に光る円い実がいっぱい、その林のまん中に高い高い三角標が立って、森の中からはオーケストラベルやジロフォンにまじって何とも云へずきれいな音いろが、とけるやうに浸みるやうに風につれて流れて来るのでした。
(鎌田東二『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』)

(39) おそらく、超一の美しい声明につれて、叔父の墓の前での鎮魂の踊りが、信濃の年の暮れの寒風に吹かれて、いつしか熱狂的なものになっていた。

(稲垣正浩『伝記文学のなかにスポーツ文化を読む』)

例文(5)と(34)～(39)を確認した結果¹⁵、この7例のうち(5)(36)(37)(38)の4例の初出は本稿で定義した現代期(1946年以降)の例文ではないことが分かった。明治・大正期で多数使われているこの「知覚感知的な進展」は現代期においては、その使用は極めて少なくなっているのではないかと考えられる。これも今回の調査結果、すなわち現代期文学作品から例文が現れなかったことへの一つの答えになるだろう。一方、BCCWJでは「音+ニツレテ」「風+ニツレテ」と言い換えできる「音とともに」「風とともに」などが多数検索されている¹⁶。現代日本語において、「音」「風」などの知覚で感知できる名詞はニツレテではなく、「とともに」と共起し多用されているのではないかとと思われる。

(40) その時ゴーという音とともに急に真っ暗になった。

(現代期 山下文男『戦時報道管制下隠された大地震・津波』)

5. まとめ

本稿は連動的な変化の進展を表すニツレテ、ニシタガッテを中心に、前接語の特徴、意味・用法の特徴などの面から、明治・大正時代と現代の用例の比較を通して、その変化を考察した。ニシタガッテはあまり変化がなかったが、ニツレテはいくつかの変化が見られた。明治・大正期で使われている前接語の「変化を表さない」名詞が現代期において使われなくなり、また明治・大正期では盛んに使われているニツレテの「知覚感知的な進展」という意味・用法は現代期になると、あまり使われなくなった。

複合辞の文法化という長い過程の中で、今回の調査はわずか100年ぐらいの間ではあるが、複合辞ニツレテの意味・用法の収斂が観察できた。ニツレテとニシタガッテのような類似した意味・用法を持つ複合辞の研究に対する一つの可能性を見いだせたのではないかと考える。これまでの複合辞の研究は共時的な観点から記述・研究されてきたことが多いが、通時的に観察し、その意味・用法の変化を記述することは複合辞研究において必要とされるのではないかと考える。

¹⁵ (34)(35)は引用などなく、それぞれの出版年は2003年、1995年である。(36)は『芥川竜之介雑記帖』の「竹杖記」の内容であるため、初出は1934年である。(37)は中里介山作の長編時代小説『大菩薩峠』の引用で、この小説は1913年～1941年間で連載された作品である。(38)は『銀河鉄道の夜』の引用で、初出は1934年である。(39)は『一遍上人』の引用で、初出1977年である。

¹⁶ 中納言の短単位検索で「音とともに」171例、「風とともに」82例が検索された。

参考文献

- 石黒圭・橋本行洋編(2014)『話し言葉と書き言葉の接点』(ひつじ研究叢書〈言語編〉122), ひつじ書房.
- 柏野和佳子・奥村学(2014)「『コーパスベース国語辞典』構築のための『古風な語』の分析と記述」, 『自然言語処理』21(6), pp. 1133-1161, 自然言語処理学会.
- 小池康(2003)「比況のモダリティ副詞の史的変遷—マルデを中心に—」, 『計量国語学』23(8), pp. 387 - 406, 計量国語学会.
- 菅長理恵(2006)「用法と語性—『～にしたがって・～につれて』を中心に—」, 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』32, pp. 47-61, 東京外国語大学留学生日本語教育センター.
- 砂川有里子(2013)「コーパスを活用した類義語分析—複合辞『ニツレテ』と『ニシタガッテ』—」, 藤田保幸編『形式語研究論集』pp. 35-60, 和泉書院.
- 砂川有里子(2014)「コーパスを活用した類義語分析—『連動的な変化の進展』を表す用法—」, 『日本語教育連絡会議論文集』26, pp. 49-60.
- 田中章夫(2001)『近代日本語の文法と表現』明治書院.
- 田中寛(2010)「漸進性と相関関係を表す後置詞—『につれて』『にしたがって—』などをめぐって」, 『複合辞からみた日本語文法の研究』(ひつじ研究叢書〈言語編〉122), pp. 80-113, ひつじ書房.
- 中溝朋子(2004)「～にしたがって」と「～につれて」, 『大分大学留学生センター紀要』1, pp. 57-70, 大分大学留学生センター.
- 松村明編(2006)『大辞林』第三版, 三省堂.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編(2001)『日本国語大辞典』第二版, 小学館.
- 山崎誠(2006)「新聞記事データに見る『につれて』『にしたがって』」, 藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』pp. 103-112, 和泉書院.

Acknowledgement

Supported by the Fundamental Research Funds for the Central Universities (Grant No.DUT13RW407): 基于语料库语言学的日语近义复合助词研究

(せい ほうほう・首都大学東京大学院博士後期課程)